
心

夏目洋介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心

【Nコード】
N3300E

【作者名】
夏目洋介

【あらすじ】
本当に人を愛するということとはこういうことかもしれません。

第一話 乾いたあとには・・・

「さよなら。元気でな。」

その一言でエイジは振り返り、私の前から去っていった。私はその後姿を見て、手で目を押さえたが、涙が止まらず、その場にひざから崩れ落ちた。そして、涙が止まる頃には、エイジの後姿すら、もう見えなくなっていた。

私は・・・今でもその場所から立ち上がることが出来なくなっていた・・・。

「っていうか、この前の客がちょううぜえヤツでさ！」

ソファの肘掛に腕をのせ、サチはドリンクバーで取ってきたグレイプジュースを一息で飲んだ。飲み終わると氷まで噛み始める。店内にバリバリと不愉快な音が響き始める。そんなことはお構いなしにサチは話を続ける。

「女子高生つてのがうちの”ウリ”なわけじゃん？それなのに会った途端その男、『このナース服に着替えてもらってもいいかな？』だって！私らの付加価値台無し！そんならそこのコスプレ喫茶にでも行きやがれっての。」

ギャハハッとサチの笑い声が響く。ミズハは恥ずかしくて周りの視線が気になった。会社帰りのサラリーマンもアイスをスプーンでつついている主婦たちも一斉にこっちを見ている気がした。そんなたくさんの視線を感じながらもしかし、ミズハはそんなサチが嫌いではなかった。周りの目なんか気にせず、好きに生きるその生き様、まさにミズハとは正反対な部分に惹かれている自分がいた。

「サチ、イスの上にそんな座り方すると、パンツ見えるよ。ほら、その男の人も見てるし・・・」

ピンクの超派手なサチらしいパンツ。見せパンだろうかと思いつつもミズハはつつい口に出してしまった。どうもサチの面倒を見たがっしてしまう。母性本能だろうか？自分で考えてみてもまったくわからない。ただ、サチみたいな子供がいたらめっちゃ大変だろうな、と自分で勝手に想像してみる。笑いが少しこみ上げてきてプツと笑うと同時に、

「おい、兄ちゃん。何ヒトのパンツ、タダ見してんだよ？金払えよな」

とサチが大声で叫んだ。ビックリして走り去っていくサラリーマン風の男の人。それを見てサチはまたギャハハツと笑った。私も奥歯まで出して笑うサチを見て笑いが止まらなくなった。

第二話 金の支配の元に・・・

サチと仲良くなったのは、エイジと別れてすぐだった。暗闇のど
ん底に突き落とされたかのような失恋の日々・・・そんな私に、

「どした？ミズハっち？死にそうな顔してますけど」

普段はまったくグループも違い、話なんかほとんどしなかったサ
チが急に私に話しかけてきた。最初は警戒心を持っていた私も、ま
ったく裏表のなく、努めて明るいサチに心を開いていった。死をも
覚悟し、かみそりを左手の手首に通したこともあった。そんな私に
とって、サチと一緒にいることで、傷ついた手首にバンソウコウを
はられているように感じたのだった。

ちなみに後に聞いた話。何であの時私に話しかけたの？とサチに
聞いたら？

「えっ？全然覚えてないんだけど・・・多分、なんとなく・・・
かな？」

まったく・・・サチらしい。

サチの裏の仕事・・・それは、今はやりの？援助交際。始めた理
由は簡単。面白そうだから。サチは良くも悪くも面白いの一言で判
断して動く。そういう私も、サチに誘われて援助を始めた。私の理
由は単に、私を救ってくれたサチが勧めてくれたから。そして何よ
りどんな人でも男の人のそばにいたかった。それだけ。最初に聞いた
ときは確かに大丈夫かなと思った。でも私はサチを信用している。
だから始めることにした。だって他に信用できる人なんてもういな
いんだもの。

最初の客はどこかの会社の役員かなんかだった。私を見るなり勝手に興奮して、あつと言う間に事は終わった。それで2万円。初めてお金をもらった時、私はそれまで働いていたコンビニのバイトをやめることにした。ほんの1時間我慢するだけでバイトの4日分稼いでしまったからだ。

それからサチの紹介により、私の客は途絶えることがなかった。私はそれでよかった。少し我慢して大金を手に入れる。お金を手にしている時、知らないおっさんに抱かれている時、私はエイジのことも忘れることが出来た。いや、心の中はあの時から変わっていないのかもしれない。本当は泣き崩れたあの場所から一步も進めてはいないのかもしれない。それに気づくのはもっと後になってからだった。

第三話 弾む話と一つの契約

そんなある日、今日もまたいつものようにサチの紹介で一人の男の相手をする事になった。駅のコーヒーショップの前で待ち合わせていると、そこに若い男の人がやってきた。私を見るなり駆け寄ってきて、

「ミズハさん・・・ですか？」

と聞いてきた。まるで恋人同士の待ち合わせのようだな。

「そうですけど・・・」

戸惑いながら答える私に、

「よかった。会えた。」

と飛び切りの笑顔を見せた。それは、誰が見ても援助の相手との出会い方ではないだろう。私は大笑いしてしまった。

「で、どうします？」

笑いも収まった私が、彼に聞くと、彼は、

「もちろん、ホテルに行きましょう。」

とさわやかに答えた。ああ、やっぱりな、私は軽い失望感と諦めが混じった思いを伏せながら、彼とホテルに向かった。

ホテルに着いて、早速シャワーでも浴びようと服に手をかけると、
彼が、

「ちょっと待ってください。」

と言って私の手を掴んだ。なんだよと思いつつ彼を見ると、

「今日は僕とそういうことはしないでいいんです。僕とお話をし
てもらえませんか？」

と言った。きょんとする私を尻目に彼は冷蔵庫のジュースを取り
出し、私に一本渡した。 「エッチしないの？お金は・・・」

「それはきちんと支払います。心配しないで。」

それならまあいっかと思いつつ、本当にくれるのかなと心配になったが、とりあえず口にしたジュースでそれ以上言葉が出なかった。

それから彼と二人でベッドに座り、たわいもない話をした。私は学校のこと、うちの家族のこと、前のバイトのこと、そしてサチのこと。エイジの話はしなかった。だってまだ思い出しはしたくなかったから。彼は破天荒なサチの話を気に入ったらしく、特にフアミレスで男の人にタン力を切った話に大笑いをしていた。一方彼・・・その時に初めて名前を聞いたのだが、ユウタは、歳は私の一こ下の15歳。だが、体が弱いらしく今は学校に通っておらず、通信を受けていること、親たちは医者をやっているらしく、家にはいつもお手伝いさんしかいないということ、将来は医者ではなく弁護士になりたいということを話してくれた。

今日初めて話をしたわりには話がよく合って、私は思ったより楽しかった。と言っても自己紹介以降ユウタはほとんど聞き役になっていたのだが・・・約束の時間もきたので帰ろうと支度をしていると、ユウタはお札を二枚私に渡した。

「楽しかったし、お金いいよ、いらない。」

断ろうとすると、

「約束だからね、受け取ってよ。その代わり、次も僕の指名を受けてくれない？」

彼はそう言つてさらに二枚のお札を渡してくれた。お医者さんの家だし、お金持ちなんだろうな、私は断るのもバカらしいのでそれを受け取った。

こうして、ユウタと私のちょっと変わった援助交際が始まった。

第四話 金と愛とのつながりの間

その後もユウタは私を一週間に2、3回は指名してくれて私たちは度々会った。最初以来ホテルにはいかず、二人で映画を見たり、ゲームセンターに行ったり、普通のカップルみたいに過ごすことが多くなった。違うといえば別れる最後に必ず、ユウタがお金をくれることだった。何回か会ったある別れ際に、ユウタは、

「ねえ、いくら払えば他の男の人とは援助をやめてくれる？」

唐突に聞かれ、私は冗談のつもりで、

「うーん・・・100万かな？ほらっ私、売れっ子だし。」

軽く答えるとユウタは一言わかったと言って去っていった。

なんかまずい事言っただかなと思いつつも特に気にせずに家に帰った。

驚いたのは次に合う時だった。白いテープでくくられた札束が一つ、ユウタの手から渡されたのだった。

「はい、これで手を切った。」

飛び切りの笑顔で私を見つめる彼に、私は何も言えず、ただうなずくしかなかった。ああ、本当の王子様がここに現れたんだ。その時は本気で私はそう思ったのだった。

大金をもらった翌日、王子様に会った嬉しさのあまり、サチにこの話をした。普段からユウタとここに行った、この映画を見たなどたわいもない私の話を聞いてくれたサチに、ぜひ王子様に会った幸せを伝えようと話をすると、サチは私の思っていた顔をしてくれなかった。

「本当に・・・そんな大金もらったの？」

珍しくまじめな顔をするサチに戸惑いながら、

「えっ？だつて王子様だよ？私、王子様に出会ったんだよ。」

手を振りながら嬉々と話をする私に対して、サチは、

「ばっっ」

と大声で叫んだと同時に私の左頬に痛みが走った。サチがぶつたのだ。思わぬことに驚きと戸惑いを隠せず私はジンジンとする左頬を押さえながらサチを見ると、サチは・・・泣いていた。そして真実を語り始めた。

「・・・ユウタはねえ、お金持ちなんかじゃないんだよ。」

「えっ」

目を丸くしてサチを見る。

それから、サチとユウタの会った時の話を始めた。

第五話 眞実は・・・

サチとユウタが出会ったのは人ごみの中ユウタがサチに話しかけてからだった。

「すみません。あの、いつも一緒にいたあの人に一目ぼれしちゃったんです。どうしたらあの人と付き合えますか？」

「はあ？ あんた何よ？ いきなりちょくKYなんだけど。」
しかめっ面をするサチに、

「いきなり声かけたのは謝ります。でも、あの人とどうしても付き合いたいんです。」

サチは悩んだ。が、いつもの悪い好奇心がうずいた、この子をミズ八のお客さんにしちゃおう。面白そう。サチは姿勢を正し、せきを一つして話し始めた。

「う、うん。わかった少年。お姉さんが君をミズ八に紹介してやる。ただし、お客さんとしてね。」

「お客さん？」

「そう、ミズ八は援助やってるからそのお客さん。お代は1時間2万円ね。」

サチは笑顔でユウタにそう言うと、ユウタは下をうつむいて少し悩んだ後、

「わかりました。お願いします。」

そう、力強く答えた。

それからのユウタとミズ八の話は、ミズ八の方から聞いていた。あれから何回も何回も会っていること、毎回お金を支払っていること。その話を聞き、興味を持ったサチは、一度どんな金持ちかとユウタの後をつけてみた。すると、そこにはとうていお金持ちの豪邸とはいえない借家に入っていくユウタが見えた。

驚きながらもしばらく見ていると、またユウタが出てきた。どこへ行くのかと見ていると、近くの工事現場だった。そこには見るからに持ち慣れていない交通案内表示を振っている姿が。それを見て真実を知ったサチは初めて罪悪感が出てきた。

私、なんてことしたんだろ・・・どうしよう・・・

次の日、サチはミズハにユウタのことを話そうとしたが、次も会う約束したんだと嬉しそうに語るミズハに何も言えず、ただ、笑顔でよかったねとしか言うことが出来なかった。

サチに真実を聞かされたミズハはサチにユウタの家の場所を聞いて急いで向かった。走っている間にユウタに何て言おう・・・何ていったら許してくれるんだろう・・・などが頭のなかをぐるぐる回ったが、家の前に着くとそれも全部吹っ飛んでしまった。

インターホンもない家のドアをそつと叩く。ユウタに出てきてほしいような、それとも出てきてほしくないような、そんな思いを秘めながら待っていると、はーいと声が聞こえてドアが開いた。思わず頭を下げていたミズハの上から

「どちらさまですか？」

と可愛い声が聞こえた。へっ？と思い顔を上げると、そこには小学生くらいの女の子が不思議そうにこちらを見つめていた。ミズハは、「えつと・・・ユウタ君の友達だけど、ユウタ君はいるかな？」と聞いてみた。

「お兄ちゃんは今アルバイトに行ってますよ。」

と可愛い声で返事をした。笑った顔はユウタにそっくりだ。ミズハはバイト先の住所を聞いてまた走って向かった。

第六話 ユウタとミズハ

バイト先につく頃には息も切れ切れに、足もパンパンだった。普段の運動不足をたたった。現場には作業着の人たちばかりでどこにユウタがいるのか分からなかった。一人一人を見て回っていき、一人一人に何だ何だと驚かれ、何人かを見た先にユウタが見えた。ユウタもミズハに気づきこちらを見つめた。

「ミズハさん・・・なんでここに？」

驚いた表情を浮かべるユウタに、近くにいた親方らしき人が、

「おつ、ユウタ、彼女か？こりゃべっぴんさんだな。もう時間だし、あがっていいぞ。学校に行く費用がたまったからって女に明け暮れてちゃオレみたいになるぞ。」

親方は笑いながらそう言うと、ユウタはお疲れ様でしたと言おうと、おじぎをしてこつちに向かってきた。

学校に行く費用？あの100万円はまさか・・・。考えがぐるぐると頭の中で回っているミズハの手をとると、行こうと言言ってユウタはすたすたと歩き始めた。

近くの公園のベンチに座り、ユウタがため息を一つ吐いてミズハに話しかけた。

「びつくりしたろ？医者の子のはずが、工事現場でアルバイトしてるなんて。」

あの時と同じ笑顔でミズハに話しかける。だが、そこには前のような優しい目ではなく悲しい目をしていた。

「なんで・・・なんで嘘ついたの？医者の子なんだって・・・」
ミズハが下を向いたままユウタに聞いた。ユウタはしばらく考え込んだように口に両手を当ててまっすぐに前を向いた。そして、一つの答えが出たかのように上を向き、

「ミズハさんの事が好きだったから・・・」

とつぶやいた。そして、

「援助までしてるなんて、どうしてもお金が必要なんだと思ったから。でも何とかして援助をやめさせたかった。貧乏人がお金持ちの振りをするなんて悪いとは思った。でもこの気持ちは譲れなかったんだ。ごめん・・・」

そうつぶやいたユウタはすごく小さく感じた。年下だから？違う。これはユウタの今の気持ちの大きさだ。本当に謝らなくちゃいけないのは私なんだ。彼をここまで追い込んだのは私なんだ。

ユウタ・・・

うつむいているユウタをミズハはそっと抱きしめた。突然のことにユウタは驚き体を震わせた。

「ユウタ、ごめん。ごめんね。私が悪かったんだ。私お金なんかほしくないんだ。元彼と別れた悲しみを援助という形で補っていただけなんだ。」

「愛が欲しい。その一点が私が援助をしていた理由。本当の愛なんてここにはないのに。分かっているのに。偽りの愛しかないって分かっているのに・・・」

ミズハの目から大粒の涙が出てきた。涙は頬を伝わり、ユウタに流れた。ユウタはそれをぬぐいもせず、そのままを受け入れてくれた。まるでミズハの心、そのものを受け入れてくれているかのよう・・・

夜の公園は誰も人がいなかった。

誰も見るものがない舞台の上で、作業着の王子様は涙するお姫様に優しく初めての口づけをした。

まばろう夢から覚めたお姫様は、驚きながらも微笑みながら王子様をやさしく抱きしめた・・・

暗闇だけがお話の終わりを告げるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3300e/>

心

2010年12月29日02時17分発行